

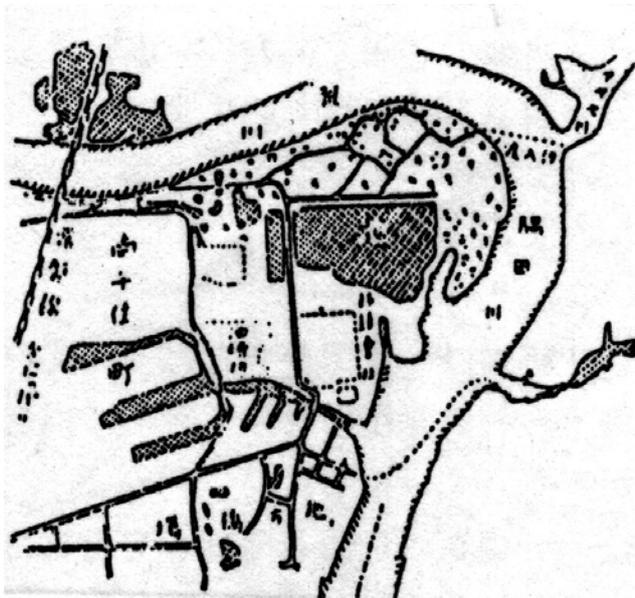
白鬚西ポンプ所界限の今昔

ここに古い地図が二つあります。明治四十二年と大正十三年の汐入地区の界限（当時は南千住町の一部。現在の荒川区南千住三、四、八丁目付近）のもので、ともに【郷土会記録】に掲載されていた手書きの地図です。

平成九年に運転を開始した白鬚西ポンプ所は、この地区の一面にあります。明治四十二年の地図で見ると、荒川が大きく蛇行している角にある【汐入の渡し】を少し南に下った川沿いの葦原辺りと思われま

す。この地図では、綾瀬川が合流した後のちょうど汐入の渡しの手より下流から、荒川は隅田川と名前を変えています。葦原の、西隣にかなり広い池沼があります。工場用地を土盛りするために掘った跡に、水が溜まってできた人工のものでそうです。大正十三年の地図の真ん中下方に【紡績会社空地】と記されていますが、その下に（ ）書きで【池埋立】とあることから、この池沼がその後埋め立てられ紡績会社の工場用地になったことがわかります。ちなみに、この紡績会社は大日本紡績（現在のユニチカ）のことです。

【汐入の渡し】のやや下流に、水神大橋が昭和六十三年に架けられました。この地図の西端をかすめている鉄路は【常磐線】です。今は、地上に顔を出した地下鉄日比谷線がこれと並行して走っています。また、【油槽所】と記されている所は、現在、再開発事業の一環として学校建設の予定地になって



▲ 明治 42 年の地図

います。

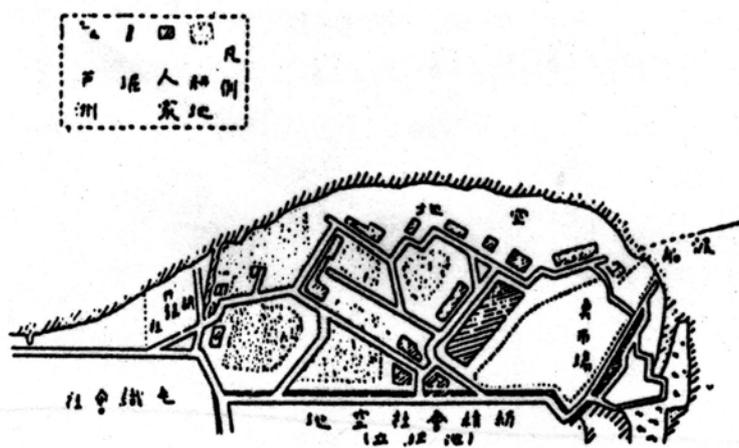
この南に、いくつかの幅の広い水路が見えます。隅田川貨物駅の構内に入りする船が着岸するためのドックと隅田川につながる運河です。引き込み線が記されていますが、貨物駅の開設時期が明治二十九年であることからすると、おそらく省略したのでしよう。貨車で運んできた貨物を船に積み換えていたのです。隅田川に通ずる運河の出入り口の横に当局の橋場ポンプ所（昭和十三年稼動）がありましたが、現在は廃止されてありません。

さらに南の【地方（じかた）橋場】と記されている辺りには、石炭を乾留してガスを製造する東京ガスの千住工場（明治二十六年操業開始）がありました。今では、液化天然ガスの貯留施設に姿を変えています。

明治四十二年の地図の中心に、貨物駅のドックの横を抜け、油槽所の前を通り荒川の堤防の手前で西へ直角に曲がり、常磐線の線路の方に向かって道が記されています。十五世紀末（室町時代の末頃）に造られた汐入堤の土手



▲ 近年の地図



▲ 大正 13 年の地図

につけられた道の名残です。この辺り一帯は、昔からしばしば洪水に襲われていました。土手の高さは三メートルもあったことですが、明治に入りまわりの土地が土盛りされたため、今では土手という感じはまったくありません。ごく普通の道に見えます。多少、道筋は変わりましたが、拡張整備されバスが通る重要な道路として今でも機能しています。

大正十三年の地図に【魚市場】とあるのは、大正十二年の関東大震災の後に臨時に開設されたもので、一年半ほど使われました。白鬚西ポンプ所のやや北にあたります。

この【魚市場】の西に人家が点在しています。汐入の集落です。人家のそばに耕地がかなりあります。ここには載せませんでしたが大正十三年の地図を見ると、先に述べたこの集落の南の工場や貨物駅がある一帯は、今の明治通りの辺りまで、ずーっと耕地が広がっていました。胡録神社の南にある【毛織会社】は明治三十九年の創業で、後に鐘ヶ淵紡績に引き継がれています。

こうして何枚かの昔の地図を眺めていると、素朴な農村であった汐入地区が明治の中頃から、かなり速いテンポで物資流通の拠点へ、また近代的な工業地帯へと変貌していったことが読み取れます。

そして、さらに現在では、この地区の約半分が都市再開発事業の計画地域に入っており、高層住宅を中心とした建設工事が急ピッチで進められ、すでに一部は入居が開始されています。汐入の集落には、小中学校と地区の守り神の【胡録（ころく）神社】とが残っているのみです。胡録神社の前には当局の汐入ポンプ所（昭和十六年稼動）がありました。橋場ポンプ所、南千住ポンプ所（昭和九年稼動）と同様に白鬚西ポンプ所（計画排水面積…約百十三ヘクタール。計画排水量…晴天時約四万七千方メートル/日）の開設に伴い平成九年に廃止されてい



▲ 橋場ポンプ所と汐入ポンプ所

ます。

それでは、白鬚西ポンプ所界隈の今昔を略史的に追ってみることにします。

汐入地区の開拓

汐入地区は、東北地方へ通じる奥州街道の第一番目の宿場町千住の千住下宿（南千住）に隣接しており、東流していた荒川がほぼ直角に湾曲して南流に転じることにより形成された、舌状の袋小路になっている地域です。古くは塩入の字が当てられていました。地名の由来は、この辺りまで満潮時には海の塩水が隅田川を遡上してくることからであろうか。

汐入地区に入るには、昔ですと、西からは千住大橋（一五九四年架橋）の際から隅田川に平行して続く汐入堤の道を辿るか、南からは平安時代の有名な歌人である在原業平も東下りの際に渡ったという、橋場の渡し（今は白鬚橋が架かっている。大正三年架橋）のすぐそばにあった石浜神社の横を通っていた道を川に沿って上流に向かうか、東からは隅田川の対岸の鐘ヶ淵とを結ぶ汐入の渡しを利用するか、の三つのルートがありました。もともと汐入の渡しは明治二十三年になってから正式に営業が許可されたものであり、江戸時代はもっぱら二つの道しかありませんでした。

宿場町や古くからの渡しからそんなに遠くなかったにもかかわらず、この地区の開拓は遅れていました。

戦国時代、川中島の合戦で敗れた上杉謙信の家臣高田氏とその同志が落ちのびて来て、この地区の自然堤防上に住み着き、刀を捨て、鋤をとって田畑を開墾したのが始まりであるといわれています。入植時は、葦原が広がり池沼が点在し水鳥が飛び交う荒蕪たる野だったことでしょう。このことが、地元の有志によって建てられた【汐入の守護神】と称する記念碑に刻まれています。

明治二十六年時点でのこの集落の戸数は二十九で、明治の末頃までは当初からの三つの姓しかありませんでした。稲作のほかに、江戸の近郊農村の地の利を生かした野菜作りが盛んで、なかでも大根が名産で汐入大根の名前で知られていました。

汐入の胡粉づくり

胡粉（ごふん）づくりは、この地区の農家の副業として江戸時代から行われていました。胡粉とは、貝殻を焼いてつくる白色の顔料のことです。日本画の白い絵の具の材料として、また、能面の顔や、雛人形などの人形の顔や手足を白く塗るために使われました。汐入のものはきめが細かく良質であったといわれています。

原料の貝殻はこの辺りの地下に塊まっている蛸殻を掘り上げたものが用いられ、明治の中頃までは蛸殻が道路に山のように積まれていました。胡録神社の境内には蛸殻を細かくすりつぶすために使った石臼が保存されています。

再開発事業の一環として新しく建てられた、スーパーマーケットの建物の外壁を飾る十数枚の陶板絵の一枚に、農家の庭先で胡粉をつくっている様子を描いた、昔の絵を複製したものがありません。山と積まれた蛸殻、【箕】で蛸殻をふるって不純物を取り除いているところ、蛸殻を【突き臼】で粉砕しているところ、さらに細かくするために水を流しながら力いっぱい【石臼】をひいているところ、水流を利用胡粉の粒度をそろえ、さらしてから丸め【天日乾燥】しているところなどの



▲ 胡粉づくり風景（荒川ふるさと文化館常設展示図録より）



▲ 石臼

再開発事業の一環として新しく建てられた、スーパーマーケットの建物の

情景が描かれています。

胡粉づくりが、当時の汐入の村を活気づけていたことを伺い知ることができます。

隅田川貨物駅の開業

もともと、この汐入地区に隣接する南千住や橋場は、舟運が盛んだった江戸時代には、河岸場として栄えていた所です。橋場（今の白鬚橋のやや下流）には、航行する荷船の積み荷を調べ「船番所」が置かれていました。舟運との関係でいうと鉄道には、河川の流れに沿って従来の舟運と並行して走る路線と、舟運の終点部を横断的に連絡する路線とがありますが、常磐線はこの二つの性格を合わせ持っていました。つまり、江戸時代以来、構築されてきた沿岸の湊と内陸の河川の河岸とを結ぶ水運路を使った江戸（東京）への物資輸送システムを、鉄道に代えようとする意図があったことを意味しています。

その拠点となったのが隅田川貨物駅です。開業は明治二十九年で、近接している旅客駅の南千住駅も一緒です。ただ、現在のようにトラックによる陸上運送が、まだまだ発達していなかったのと、大口の貨物の受取人である工場、問屋などが川沿いに立地していたため、この駅で貨物を船に積み換えて昔ながらの舟運を使って各戸に配達していました。隅田川貨物駅は、水陸の



▲ 水門跡

運送路が会合する、新しい意味での物資集散の一大拠点でした。

常磐線は、当初、私鉄の日本鉄道会社が経営しており海岸線と呼ばれていましたが、その沿線にあった常磐炭坑から掘り出された石炭が主な貨物であったことから常磐線と改名されました。

南千住四丁目を中心とする広大な駅構内には、たくさん引き込み線が引かれ、ドックが何本も掘られました。貨車で運ばれてきた石炭や木炭などの貨物はモッコで担いで荷揚げされ、待機していたダルマ船に積み換えられました。近くの工場の貯炭場までは馬車で運びました。馬車屋や蹄鉄屋それに回船問屋も集まっており、馬車のわだちができないように木で舗装した道もつけられていました。出入りする船の船頭や荷揚げの労働者でたいへん賑わったそうです。

この駅の近くには、石炭を原料とする東京ガスの工場（明治二十六年操業開始）が、また少し離れて石炭を燃料とする東京電力の火力発電所（明治三十九年操業開始、現在の南千住七丁目、当局の南千住ポンプ所の辺り、お化け煙突で有名だった北千住の火力発電所の前身）があり、東京のエネルギーセンターを形成していました。火力発電所は大正の中頃に廃止されましたが、ガス会社は現在でも原料を石炭から天然ガスに代えてその業務を継続しています。

大工場の進出

明治三十九年の東京毛織物会社（後に鐘紡の南千住工場）に引き続いて、四十二年に東京紡績の工場が操業を開始しました。インド、中国などから輸入した綿を紡いで綿糸をつくっていました。国産の綿糸の輸出は、日本における産業革命の一翼を担うものでした。蒸気動力を利用した生産性の高い紡績機が導入されています。エネルギー源は石炭です。この会社は大日本紡績を経て現在、ユニチカとなっています。最盛期には二千六百人もの従業員が勤めていました。

日本の各地から集まって来たたくさんの女工さんが、寮生活をしながら朝晩二交替の一日十二時間労働を強いられていました。三交替になったのは昭和の初めになってからだそうです。【汐入の民俗】に載っている聞き書きには、

『大正八年に十三歳で来た当時の汐入は、道なんかほとんどなかったわ、ぽつんぽつんと明かりが見えるだけで真っ暗。夏なんてカエルの鳴き声がうるさかった』

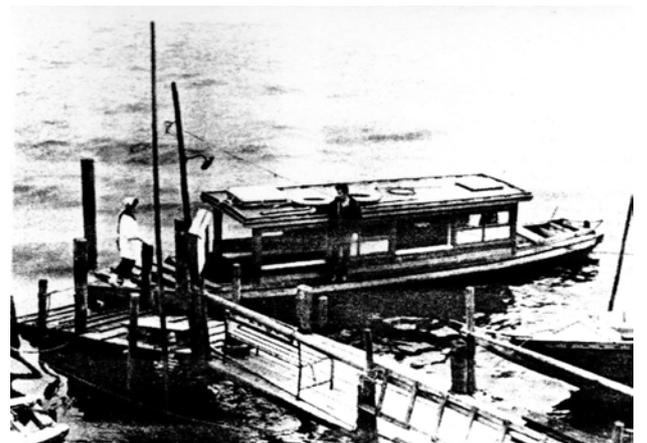
『そんな苦勞を何年も重ねて出世していくのです。助っ人、見習い、そして台（機械）を持って、タマアゲになって、裏回りになって、それから見回りの役がつくんです。見回りというのは、十五台くらいの台の責任者になるのよね』

『（南千住）三丁目に餅とか豆菓子売っている和菓子屋が今でもあるでしょう。あそこからよく買いましたね。それをね、夜業（遅番）の時には眠気ざましに食べながら働いたものです』
とあります。

日紡や鐘紡の南にはすでに、日本石油の油槽所（明治三十四年操業開始）が、そして隅田川貨物駅の南には東京ガスの工場がありました。これらの工場に勤める人達は、南千住駅のほか、汐入、水神、橋場のそれぞれの渡しを利用して通っていたそうです。

この狭い地区に、まるで近代工業の見本市のように様々な業種の工場が立地していました。この地区が古くからの舟運の拠点と新たな鉄道輸送の拠点との接点に位置しており、原料や燃料の調達に便利であったという好条件によるものと思われます。

汐入地区の耕地は当初、三十八町歩（約三十八ヘクタール）もありましたが、こうした大工場の進出により、大正の中頃には三町歩にまで減りました。さらに、大正十二年の関東大震災の後には、汐入の集落の近くにわずかに残っていた耕地も急速に宅地化され農村としての性格を失っていききました。



▲ 汐入の渡し

紡績工場の撤退と貨物駅の縮小

昭和に入り、世界恐慌のあおりを受けた日本経済は深刻な不況に陥り、木綿の値段が暴落し、これに産業構造の変化が追い打ちをかけ、紡績工場は操業短縮、減給などの合理化対策が強く求められるようになりました。

さらに、太平洋戦争中は、軍需工場に転用され、飛行機の部品や落下傘の生地をつくっていたそうです。戦後、大日本紡績の工場は進駐軍に数年間接収されたが、その後、操業を再開していません。しかし、昭和三十年代の後半に工場が移転したため、その跡に広大な空地が残されました。昭和四十年代の後半に、この敷地の一部を使ってボーリング場やゴルフ練習所ができました。さらに自動車教習所としても使われるようになりました。昭和四十年代の後半には鐘紡も撤退しました。

東京都が、日紡、鐘紡、日本石油それに汐入の集落を計画区域とする、都市再開発事業を決定したのは昭和五十年代の後半です。建設工事が始まるまでの土地の有効利用として自然広場や運動場がつけられました。一方、隅田



▲現在の貨物駅

川貨物駅の構内も、舟運の衰退からドックや運河は埋め立てられ、さらに貨物輸送のトラックへの移行により、鉄道による貨物輸送そのものが陸上運送における独占的な地位を奪われ、今日ではコンテナ輸送にその役割を変えています。そして、敷地の一部は、昭和三十六年に開通した営団地下鉄の駅舎電車区、車両工場あるいは超高層住宅用地などに転用されています。

再開発事業の建設工事の狭間で

梅雨の合間の日差しが強い六月のある日に、白鬚西ポンプ所のすぐ北にある公園を抜けて、汐入の集落があつた所を訪ねてみました。人はほとんど住んでいませんでした。ただ、学校帰りの子供達とは行き交いました。転居した高層住宅に帰るのでしょうか。しかし、これも新しい校舎ができるまでとか。屋敷に植えてあつた木々と縦横に走る曲がりくねつた生活道路と何軒かの家が残っているだけでした。更地になつた空地はフェンスや柵で囲われ、立入りを禁ずると書かれた立て札が立っていました。そんな中で見た、高く伸びたビワの木にたわわに実つていた橙色の実が妙に印象的でした。山本周五郎の「樅の木は残つた」ならぬ「枇杷の木は残つた」の風情でした。

取り壊す寸前と思われる廃屋と、これとは別の家の門を写真に撮ることができました。廃屋には酒屋の看板が掛かつていました。酒屋を営んでいた頃は、近所の人たちの情報の交差点としての機能も併せ持ち、この集落の人々の交流の場だったのではないのでしょうか。また、立派な庭木が茂る旧家と思われる屋敷跡に残されていた瓦屋根の門構えは、朽ちかけているとはいえ、どっしりとした趣を見る人に与えるものでした。「栄枯盛衰、人の世のことであり。古いものを新しいものに再生する再開発事業の宿命だろうか」などと感慨に耽ることしきりでした。



▲門

そして、この探訪の日からしばらくたったある日、参考資料を図書館で調べていたとき目にしたのが、「東京いま、むかし」に載っていた桐谷逸夫氏の描いた汐入の商店街のスケッチです。あの酒屋さんも、この商店街のどこかに描かれているのではないかと、虫メガネで探したくなるほどに細密な絵です。本人の「消えゆく町汐入」と題するエッセイが添えられており、それを読んでまたビツクリ。「雨の中でじつと夕焼けを見ていたら、遠くから酒屋のおやじさんが、「古い傘だけど持っていくかい」と声をかけてくれた。小降り



▲ 商店街 (スケッチ)



▲ 酒屋の廃屋

だったので丁重に辞して帰路についた」と書かれていたからです。桐谷氏に声をかけたおやじさんは、あの廃屋の酒屋の主人のことでしょうか。もつとも、この地区には公衆浴場が二軒もあったということですから、酒屋さんもこの店に限らず何軒かはあったはずですので、その確率は低いのですが。

再開発地区の完成予定図

ところで、この地区の再開発事業は、対岸の墨田区白鬚東地区の防災拠点づくりとペアーになっているもので、震災や大火などの万が一の災害に備えた街づくりを目指しています。着々と工事が進められています。完成の暁には、次のようになるとのこと。

「白鬚西ポンプ所のすぐ南隣は航空高専で真新しい立派な星型の校舎です。現在地より少し北寄りから移転してきたのです。高専の道路を挟んだ西側には、高層住宅が建ち並びます。小学校もできます。ポンプ所の北は公園で、この公園を抜けて水神大橋（避難用）につながる道路を渡ると汐入の集落の跡ですが、そこにも高層住宅が林立しますし、その、一面には移転して建て替えられた中学校が見えます。隅田川沿いは、スーパー堤防や緩傾斜型堤防とこれに続く幅の広い带状の緑地（避難広場）がめぐっています。堤防には遊歩道が設けられ、緩やかな傾斜で水辺に降りられるようになります。

また、水神大橋の上流にもう一つ、避難用の橋を架けることになっています。胡録神社も今より手前に移されるとのこと。下水道関係も、管きよ、ポンプ所ともリニューアルされます。いち早くできた白鬚西ポンプ所もこの一環です。まさに、いっさいがっさいが再開発、再構築です」こうして新しく



▲ 完成予想図

生まれ変わった街の中で、純和風の大屋根でポンプ所全体を覆った、斬新なデザインの白鬚西ポンプ所は、スーパードイツとともに、浸水からこの地区を守るシンボルとして活躍していくことでしょう。

(文責 地田)

参考資料

「荒川区史跡散歩」 学生社

「江戸東京を歩く宿場」 三一書房

「汐人の民俗」 荒川区

「南千住の民俗」 荒川区

「東京いまむかし」 日貿出版社

情報提供 武藤勝男氏



▲ 白鬚西ポンプ所と航空高専